

序文

エリヤース・フリー

本書が扱うのは、ホロコーストとナクバの複雑で重層的な交錯である。これは挑戦的なテーマであり、私の主要な文学作品、そして知識人としての仕事の核心にあるものだ。小説『ゲットーの子供たち』の第二巻に取り組んでいたとき、私はイスラエルの衝撃的な言葉に出くわした。シオニストの計画がパレスチナで生み出した両義性そのものをまさに要約した言葉である。パレスチナ人を示す際に一般的に用いられるレッテル、つまり「破壊工作^{サボタージュ}者」とか「テロリスト」といったレッテルは、驚くべきものではない。これらは長く続く植民地主義の語彙に由来する。もっとも、こうしたレッテルには多くの含みがある。昨日のテロリストが明日の首相になるかもしれない。事実、イスラエルのメナヘム・ベギンとイツハク・シヤミールの場合がそうだった。またヤーセル・アラファートのように、ノーベル

平和賞を受賞する場合かもしれない。彼はその後パレスチナの第二次インティファダのあいだに「テロリスト」の飛び地に戻され、ラーマッラー地区で包囲され、最終的に死を迎えたのだった。

私に衝撃を与えたのは、ユダヤ人国家の建設直後に広く使われるようになったSaboninという言葉である。これはホロコーストを生き延びて「約束の地」に向かった人々を指す言葉だった。この言葉には、二重の意味がある。臆病者という隠喩的な意味、そしてアラビア語でもヘブライ語でも同じことだが、石礮を示す語源saboninに由来する文字通りの意味である。この語の背景にあるのは、被害者の遺体から石礮を作ったという、ナチによるホロコーストの蛮行だ。根拠のない逸話だが、当時は多くの人が真実だと思ってい

た。Sabonim〔石鹼^{サボニム}みたいな人々^ニ〕には、ナチの収容所で衰弱したユダヤ人を示すために使われていた言葉 Musshanner（イスラーム教徒^{ムッシュナー}）に通じるところがある。死へと追いやるる前に、衰弱したユダヤ人はそのように「イスラーム教徒^{イスラム}＝回教徒^{リム}と」みなされたのだった。Musshanner という言葉は、本書のギル・アニジャールの章で見事に分析されている。

これら二つの言葉、「石鹼^{サボニム}みたいな人々^ニ」と「イスラーム教徒^{イスラム}」から始めたい。私が始めて「石鹼」の両義性に直面したのは、一九九六年にパリのアラブ世界研究所で開催されたモナ・ハートゥームによるインスタレーションを訪れたときのことだった。

このパレスチナ人アーティストが制作したのは、有名なナールスの石鹼二千四百個を敷き詰めて下地とした地図であり、そこにはパレスチナにおけるイスラエル占領地の境界線がはっきりと刻まれていた。ナールスの石鹼のほのかな香りが、研究所のオープン・スペースと廊下に行き渡っていて、私の全感覚を捉えた。興味深くも「石鹼という」この素材を選んだアーティストについての私の自身の解釈は、パレスチナのオリブオイルから作られた石鹼の匂いそのものが占領へのアンチテーゼであり、その土地の匂いが最終的には暴力や境界線や占領を克服することができるはずだろう、というものだった。このインスタレーションに対するイスラエル側の反応には、驚くべきものがあった。石鹼を用いることはナチの犯罪を人種差別的に是認することだ、というのである。パレスチナ人アーティストの作

品に対するこのような解釈に直面したとき、被害者と迫害者が共有しうる言葉遣いを見出す手段はあるのだろうか、と途方に暮れてしまった。実際、「両者が」共通の語彙を手にする可能性はあるのだろうか？ 彼女の芸術は人道の本質を破壊するものだというシオニスト的解釈を煽る恐れがあるために、ナールスの石鹼をパレスチナ人アーティストが使うわけにはいかなくなるはず、一体どうやってパレスチナ人は自分たちの悲劇を表現すればよいのか？ それとも彼らの悲劇は抹消されなければならぬのだろうか、より悲劇的な物語が人種差別的なヨーロッパのガス室で作られたがゆえに？ ホロコーストの被害者の子孫だと主張する人々がパレスチナ人の声を押し殺し、彼らに対して漸次的な排除を受け入れるべく強いることで、「新たな」被害者たちはさらに被害を受けなければならないのだろうか？

このコンテクストにおいて、イスラエルで広まっていた「石鹼^{サボニム}みたいな人々^ニ」という言葉の真の意味は何なのか？ その複数の意味を真に理解するには、どうしたらよいのか？

もう一つ考えてみたい「イスラーム教徒^{イスラム}」という言葉の方は、世界で人種差別とファシズムが復興するただなかで、今やあらゆるイスラーム教徒とアラブ人を潜在的なテロリストとして色づける包括的な用語になっている。この結果、イスラーム教徒とアラブ世界全体に、屈辱と死という重税が課せられる。

ナチの死の収容所では、この言葉はまったく異なる意味を持

っていた。「イスラーム教徒」は抹殺されることに注意を促すための印として用いられていたのだ。差し迫る死を前にして、そこでは言葉の意味が混乱していく。事実、ジェノサイドの恐ろしさにふさわしい唯一の言葉は被害者の沈黙であるがゆえに、言葉はあらゆる意味を失う。

私はこの二つの言葉を分析したいわけではない。これらに言及しているのは、ただ誤解というものが言語を定義する要素のひとつだということを指摘するためである。言語はコミュニケーションの手段であるという主張は、ただ言語の一機能のみを強調しているにすぎない。実際、言語は幅のあるニュアンスを生み出し、これが言葉の意味にもなる。かくしてしばしば、明白な言葉よりも暗黙裡の言葉の方が意味深いことが多い。昔のアラブの言語学者たちは、アラビア語で「話す *qala*」という動詞の語源を *Kalana* だとしていた。これを訳せば「傷つける wound」という動詞になる。言葉は魂を傷つける、ということだ。したがって、私たちは言葉が与える傷と人間の苦しみの連関を通じて、言葉の真の意味を探るのになければならない。

同様に、本書のいくつかの章で示されているように、「ホロコースト」と「ナクバ」という用語は、どちらも両義性の衣で包まれている。

「ホロコースト」という言葉は、第二次世界大戦下にナチの死の収容所でユダヤ人に加えられた破局カタストロフを示すために用いる言葉として、歴史家や学術界一般に受け入れられるようになる

った。だが、ホロコーストの存在を否定したり、被害者の数を疑ったりする反対派の声もまだ残っている。これらの声は現在のところ取るに足りないものかもしれないが、そこに体现されているのはヨーロッパと合衆国におけるファシスト右翼の台頭に伴う懸念すべき傾向だ。それは新たな反セム主義ネオ・アンチ・セムティズムの種を内包しており、いくつかの形態をとりうる。そのうちのひとつが、反イスラーム感情にほかならない。

他方、「ナクバ」という言葉は、パレスチナ人の破局カタストロフを示すために用いられる言葉で、多くの解釈にさらされた。こちらは一九四八年、ダマスカスの歴史家コンスタンティン・ズライクが用いた造語であり、アラブ人の語彙にすんなりと受け入れられはしなかった。パレスチナ人の悲劇についての自主的な定義として場を持つようになったのは、ごく最近のことにはすぎない。現在ではこの言葉の定義力が受け入れられているにもかかわらず、イスラエルの法律は国内に居住するパレスチナ人の被害者が自分たちのナクバを記念することをいまだに禁じている。

ホロコーストはヨーロッパの人種差別イデオロギーの本質を体现したものであり、様々な哲学的、政治的、宗教的ルーツを持つ。どのように反セム主義アンチ・セムティズムが誕生したのかを探るのなら、十字軍やアンダルシアの「レコンキスタ」に続くスペインの異端審問などについて、歴史家たちの記録を丹念に調べる必要があるのかもしれない。しかしながら、反セム主義がその頂点に達したのは、ナチスがヨーロッパで実施した野蛮な「最終解決」

でのことだった。

パレスチナ人のナクバは、別の歴史的现象と結ばれている。ヨーロッパの拡張主義的な植民地化、つまり広い地域の植民地化に帰結した「文明化の使命」である。とくにアフリカでは、北部のアルジェリアからローデシア、そして南アフリカを經由して広がった。シオニストの計画は、その創案者たちにしたがえば、この現象の一端を担うものだった。

本書のホナイダ・ガニムの章で説得力をもって論じられているように、シオニズムは二つの異なる事柄、すなわちホロコーストとシオニストの計画を、うまく合成したのである。パレスチナの地にイスラエル国家を建設し、先住民を追放した後、「すべてを」ホロコーストに対する論理的な回答として描くことで、合成がなされた。

十九世紀の東欧でボグロムを引き起こした反セム主義の現実が、ユダヤ人国家を計画した創案者たちの出発点だったことは本当だ。だが、当時浸透していた反セム主義に対する彼らの回答は、ただ一つの解決策だったわけではなく、不可避の解決策だったわけでもない。ユダヤ人の選択肢には、ブントのような民族のかつ文化的な統合もあった。もう一つの選択肢は、民族国家という考えを拒否するものだった。この拒否は、正統派ユダヤ人の潮流に支持された。民族国家はユダヤ人の宗教的信念に反するという理由からである。第三の選択肢は完全な統合で、自由主義やマルクス主義の信奉者が提唱していた。シオ

ニストの選択肢が他の可能性を圧倒したのは、もっと後の段階にすぎず、第一次世界大戦後にパレスチナが英国の委任統治下に置かれてからのことだった。それが根づくようになったのは、第二次世界大戦後である。しかしシオニストの選択肢は、当初の植民地主義に忠実なままだった。バシール・バシールとアモス・ゴールドバーグが本書のイントロダクションで示しているように、そこには国家の計画と植民地主義の企図が並存しており、内在的な矛盾がある。これではどんな解決もありえない。

あらゆる観点からみて、ホロコーストとシオニストの計画の合体は、これをもとにイスラエル国家がその「正統性」を築き上げた一つの神話であり、どんな批判が浴びせられても手にできる武器であり続けている。イスラエルの非人道的行為、つまり西岸地区への不法入植、世界最大のゲットーと化したガザの包囲、エルサレムにおける組織的な民族浄化。これらに言及するだけで、反セム主義という悲憤の声が高まる。言葉の二義性という魔法が、こうしたことを可能にしたのである。

パレスチナ人は、自分たちの破局を示すために「ホロコースト」という言葉を用いることは控えた。その目的には別の言葉遣いが選ばれた。これは二つの歴史的な出来事の本質的な差異、両者を取り巻く事情と両者の意味に関する差異を——必要に応じて——あらためて示すためである。イスラエルのいくつもの実践がナチスのそれを思い出させるかもしれないとしても、そのような比較の罠に陥ることは間違いだ。比較したところで、

現在の状況を特色づけている物事が曖昧になるだけだろう。これは多くのイスラエル人、ユダヤ人、パレスチナ人、アラブ人が犯した誤りで、一九四〇年代のパレスチナ人指導者の一部が抱いていた「敵の敵は味方」という誤った信念ほど由々しきものはない。ナチスが協力するという大いなる愚行へと彼らを導いたのは、そうした信念にほかならない。

このような比較の罣に陥らないようにすることが大切だ。ナチの恐怖機構^{ホロイダツ}によって生み出された純粹な悪が途方もないからというだけでなく、二つの出来事のあいだに内的な差異があるからでもある。ホロコーストは人間の歴史における主要なエピソードのひとつとして、人種差別に陥る可能性がつねに存在することを浮き彫りにしている。それは人種差別の油断ならない侵入に警戒し、その思い込みに対して反論することの重要性を、人類全体に継続的に思い出させてくれるものであるべきだろう。他方、ナクバに体现されているのは、南アフリカのapartheid^{アパルトヘイト}体制を生んだのと同じ植民地拡張主義の現実だ。南アフリカの恥ずべき体制は、アフリカ国民会議の主導のもと、世界中の人々を反対闘争へと駆り立て、ついに根絶されることとなった。

ホロコーストとナクバは、どちらも人種差別に対する人類の本格的な闘争に関わるという点で似ている。ホロコーストの記憶は、人類の集合的記憶として残す必要がある。だが、これは拡張主義的植民地支配——今日の世界に残るその最後の砦がイ

スラエルである——に断固たる態度をとることによってはじめて可能になる。

私たちは調和を必要とする二つの記憶に直面しているのだろうか？

ナクバを記憶として扱うことは、その意図とは関係なしに、多くの人が陥りやすい罣である。ホロコーストは人類の集合的記憶として保存されなければならない、その教訓は内面化されなければならない。こちらは近い過去に起こった野蛮な出来事であり、その意味で歴史の一部、つまり不可避の真実として人類の集合的な魂のうちに埋め込まれる。それはホロコースト否定論者や、あらゆる形の抑圧、民族浄化、人種差別などの言い訳としてホロコーストを利用しようとする人々から保護されるのでなければならない。

ナクバはこれとは内在的に異なる事象である。一九四八年におけるパレスチナ人の強制的な民族浄化をもって、血にまみれたその最初の章が書かれた。だが一九九三年にパレスチナ人とイスラエル人が交わしたオスロ合意のあいだに、ナクバはほとんど漠然となった記憶のように思われた。相互の妥協のために、両陣営によって封印されたのである（本書のナデイーム・フリーの章を参照）。しかし、それが蟹気楼^{カニキド}だったことを証明したのがまさにオスロ合意で、両陣営はこの合意をそれぞれ別様に解釈したのだ。パレスチナ人の理解では、これは西岸、エルサレム、ガザの占領に対する終着点であり、また自分たち